

■ 亀田図書館新築移転記念講演会

日時 平成 24 年 11 月 11 日（日）午後 2 時～3 時 30 分

会場 江南区文化会館多目的ホール

「俳句の里-亀田郷と俳人たち-」

講師 蒲原 宏 氏

（俳誌「雪」主宰・元県立がんセンター副院長）



【講演会】

はじめに

皆さんこんにちは。かなり前にこの講演をお約束したのですが、さて今日まで生きているかどうかと思っていましたが、幸い、生きておりまして、しゃべらなければならないことになって、ちょっと困っちゃったなと思うわけであります。

演題であります、ちょっと話が外れるかもしれませんが。私はどうも、話をしていると本題から外れるくせがありまして、昔、副院長と言われたのですが、よくいらんことを言うものですから、みんなから「吹く院長」と言われていましたので、今日もちょっと“吹かして”もらいます。

私は5つのときから亀田へ来ております。というのは、私の家の境内のすぐ脇に佐藤という博打うちがおりまして、私はその人に非常にかわいがられました。その人のお里が亀田小学校のすぐ脇だったのです。そこへ夏になるとホテルを見に連れてきてもらって、遊んでおりました。幼年時代から小学校時代は毎年ここへ来ておりました。年取って俳句をするようになりましてからよくここへまいりました。素十先生、みづほ先生とよくまいりました（虚子先生とは一緒に来たことはありませんけれども）。そういう因縁がございます。

亀田は、今は整形外科のメッカみたいながありますけれども、昔は亀田には整形外科の専門医がいませんでしたから、患者さんは困ったのです。亀田の整形外科の患者はみんな大学病院に行きます。来られないようになって、動けなくなると往診を頼みます。そのころは大学でも往診をやりました。私はよく亀田へ背骨の結核の患者で寝ている人の膿を取りにきたりしました。時間がかかるのですが、大体大学の仕事が終わってから来るわけです。治療をやっているうちに、夜になり最後の汽車がなくなりまして、終戦直後ですから、バスもありませんしタクシーもありません。しょうがないから、亀田から新潟まで道具を持って歩いて帰ったことが何回かあります。その間に、俳句をやっていてよかったと思うのは、俳句を詠みながら夜道を2時間以上かけて新潟まで歩いて帰ったのです。そういうことがちょいちょいありました。

このごろは、亀田に「雪」という俳句雑誌の発行所がありますから、よほどのことがないかぎり最低1回は必ず来ております。そのようなことで、亀田とは非常に縁があるのです。ここから出た代議士の佐藤さんという人の家族が村杉温泉で遭難したときも、子どもさんが1人だけ助かったのです。その時に私は主治医で治したということがあって、その後、亀田に来てだいぶごちそうになったおぼえがありますが、もうみんな亡くなってしまいました。

亀田は昔から新潟市と同じくそれほど文化の程度が高いところではなかったのですけれど

も、俳句をやる人はぼつぼついました。郷土資料館でご覧になるとよく分かりますけれども、その頃の俳句は大したことはありませんでした。ちょっとした本が出ておりますが、俳句をする人は江戸時代は大体医者だとか、地主だとか、ちょっと裕福なお百姓さんがやるという程度でしたが、亀田に小学校ができてから、明治の初めですけれども、まだ識字率が44パーセントくらいしかなかったのです。ところが今がほとんど100パーセントでありますから、そういう時代になってきますと、少しずつまともな俳句らしいものをやる人が増えてまいります。

亀田がいわゆる俳句の里と言われるようになったのは、それほど新しいことではないのであります。昭和のはじめころからようやくなってきた。それはどういう原因かということ、新潟に医科大学ができて、中田みづほ先生という「ホトトギス」のチャンピオンが赴任されたということがまず第一のポイントであります。そのことがなければ、それほど発達しなかったのではないかと私は思います。やはりリーダーとなる立派な人がいないと何事も発展しないのです。決して下手な人ばかりがいたわけではないのですけれども、俳句のリーダーになるというのは大変なことなのであります。

俳句の近代化―虚子と碧梧桐(へきごとう)―

まず、日本の俳句の近代化といいますか、そういうことをお話ししておかないと理解できないのではないかと思います。亀田のことに直接入る前に、長いですが、その話をしてみたいと思います。

ご存じのように、日本の現代的な俳句は子規が口火を切るわけであります。それまでは宗匠俳句といいまして、茶化したり、もったいぶったようなあまり大した俳句ではなかったわけでありますが、芭蕉の系統を引く俳句仲間も金かせぎするとかいろいろなものがありましたけれども、文芸の近代化といいますか、文学の近代化というものの中に俳句がきちんと足を入れるきっかけをつくったのは正岡子規であります。その子規の弟子に2人のいい人がいたわけです。それが高浜虚子という人と河東碧梧桐という、同じ松山出身の2人がいたのです。碧梧桐が1つ年上で、虚子が1つ下なのです。中学校が一緒なわけです。碧梧桐が1年遅れたわけです。ちょっとできが悪いんですかね。

松山の中学を出ましてから、京都の第三高等学校へ行くわけであります。虚子をはじめ医科を目指していたのですけれども、数学などができなかったのです。それで文学をやろうということになったわけです。碧梧桐も文学をやるということで、第三高等学校(三高)に入ったわけです。昔はこの学校に入るのは容易なことではありませんでした。ここへ入りまし

たのですから、両方ともある程度頭がいいわけです。いいのですけれども、学制改革がありまして、2 人とも、仙台の二高へ移らせることになったわけです。仙台にいて、文学をやるという気が起きたわけですが、郷里で子規といろいろ関係があったものですから、子規に文学を学んで一緒に身を立たいということで、学校を辞めて東京へ出ていくわけです。子規の近くに下宿してごろごろしていた。そのころは2 人とも遊び人で、吉原へ行って女郎を買ったり、かなり悪いことをしていたらしいですね。

文学の勉強と俳句をそれなりに一生懸命やっていたのですが、明治 35 年に子規が亡くなります。この2 人が最後まで子規の面倒を見ていたわけです。子規が明治 35 年 9 月 19 日に亡くなりまして、「ホトトギス」という雑誌が前からあったわけですが、それを2 人で引き継ぐわけでありましたが、途中から虚子は俳句よりも小説を書くことに移るわけです。その当時、国民新聞という新聞の俳句の選は碧梧桐のほうがやっており、俳句のほうの第一人者のようになっていった。虚子は小説を書くようにしていた。碧梧桐は子規が亡くなってから 5、6 年経ちますと、全国に新しい俳句を普及して回り歩くわけです。明治 40 年になりますと、碧梧桐は東京を出まして、青森から回って新潟のほうまで、各町まちに行って、1 日の記事を書いて、「日本及び日本人」という新聞があったのですが、その新聞に毎日のように記事を書くわけです。全国を回ってリポートを書いて、後で『三千里』という本になるのですが、三千里を歩くなかで、明治 40 年 11 月 1 日から 12 月 12 日まで新潟県の各都市をぐるぐる回って歩くわけです。佐渡から高田からあの辺をぐるぐる回ってリポートを書いているのです。それを『三千里』の中にきちんと毎日の記事が載っております。どういう句を作ったか、どこでだれと会ったかと。新潟の拠点で、横越出身の小林存（号を「烏啼」といいますけれども）、この人は碧梧桐に心酔いたします。明治 37 年から新潟新聞の主筆で俳句の選をやるわけです。

その前には會津八一が若いときに八朔郎の俳号でやっていたのです。新潟中学が明治 26 年にできまして、明治 30 年ごろから 35 年ごろまで會津八一は「東北日報」などの選をしていたわけであります。あのころ新潟中学といいますと、今では大した学校ではありませんけれども、新潟県における大学みたいなものでした。長岡中学と新潟中学というのは今でいう大学みたいなものです。今は 20 くらいわけのわからない大学がいっぱいありますけれども、ちょうど 20 歳くらいまで、18、9 歳くらいで新聞の俳句の選をやるということをしていたわけです。というのは、「ホトトギス」が最初できたときに、1 句ばかり會津八一の句が載ったわけです。會津八一の家は社交場の女郎屋ですから金持ちです。文人などが来るものですから、そういった人々と接触があります。例えば尾崎紅葉などが来て、「よく勉強する男だな」ということで、會津八一に鉄杵（てっしょ）という俳号をやるということまでありまして、そ

れはまだ 17、8 のころであります。ですが、會津八一は自分の「八一」がいいということで、「八朔郎」とか「八一」という名前で選をしていたわけです。そのときの句などは本当に幼稚で、今の人たちが笑うような句なのです。「かあと鳴く天長節の鴉かな」、そんなのでも選者ができたということで、いかに新潟県の俳句の文化程度が低かったかということが分かるわけです。明治 35 年ごろになりますと、早稲田大学へ行ってしまうわけですが、その後、小林存が新聞俳句の選をやるわけです。そのころから、碧梧桐の俳句は、明治 44 年近くになりますと、子規などが言った、季語があつて 17 文字でという、いわゆる有季定型というものから外れてくるようになります。

出雲崎に佐藤耐雪という人がおりまして、これは本屋さんで、いろいろな雑貨もやって、本を売っている人ですが、この人のところへも碧梧桐は寄っていくわけです。何日か出雲崎に滞在するわけです。明治 42 年 6 月に来まして、また 1 月くらい県内を回るわけです。新潟県内の俳句人たちは、子規の俳句よりも碧梧桐のほうに全部なびいていったわけです。それに佐藤耐雪さんも一時心酔するわけです。

ところが、佐藤耐雪さんはしばらく付きあつたが碧梧桐の俳句がどうも気に入らないということで、大正元年、明治天皇が亡くなられた年に上京いたしまして、虚子のところへ行くわけです。虚子のところへ行って、指導に来てくれませんかということを話していたわけです。ところがそのころ、虚子は俳句をやるか小説をやるかということでゆれており、小説を一生懸命に書くが小説はなかなか売れない。「ホトトギス」も売れないのです。大変な経済的なピンチになってきたわけです。碧梧桐は着々と全国を回って地方の指導者も増しているし、ほかの雑誌にも続々俳句を発表するような傾向になってきました。

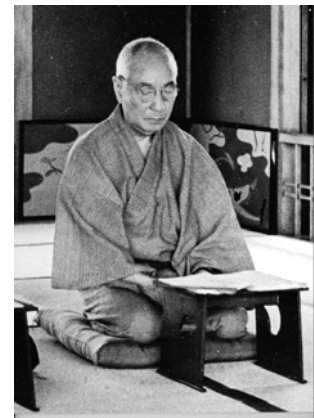
「ホトトギス」の経営は虚子に投げつけられたものですから、虚子はノイローゼになりまして、下痢はするわ、胃は痛むわ、入退院を繰り返すわけです。自分でも書いていますけれども、身体は痩せて目はくぼんで、物が書けないということで、編集に携わっておりました嶋田青峰という人がおりまして、この人に手紙を書いたり、その苦しい状況を大正 2 年の「ホトトギス」に 3 回にわたって載せるのです。今日はだめだと、今回は書けないと。俳句なんか全然載らない月も大正 2 年にはあるのであります。そのときの文章を見ますと、何をすることも嫌になったと。僕は激烈な神経衰弱だと。週に 1 回は下痢をして止まらないと。今でいうとストレス潰瘍を起こしたわけです。大腸から出血し医者に行ったけれども治らないので休養していると。鎌倉の寿福寺の霊水といういい水があるから、そのお水を飲んでいとか、全くノイローゼそのものの状態になったわけです。うつになったり躁になったりしまして、酒を飲んで句会をやったり、めちゃくちゃな時代が大正 2 年にあったわけです。

全国では碧梧桐の俳句の指導者が次々と増え勢力は増していくのに、虚子は子規からまか

された「ホトトギス」が経済的にうまくない。子どもは次々と生まれる。あの人は7人くらい子どもがいます。54歳まで子どもを作っていましたからね。大体、23歳のときに下宿屋の娘に手をかけて一緒になって、23歳から「ホトトギス」を経営していくわけですから大変なわけですよ。今の23歳の人ができるかどうか分かりませんが、次々と子どもができて、そのおかげでほかの女に手を出さなかっただけ俳人の中では偉いと思うのです。俳人の中では女につきつきと手を出すのがときどきあるわけですが、そういうところは非常に潔癖な方であります。また、そういう余裕もなかったのでしょう。

虚子と越後路

そういうことで、体のことが気になって、手紙にも、「温泉でも行って休みたいと思うのだけれども」ということを書いています。「ホトトギス」そのものにそれを正直に発表しているのです。9月には修善寺の温泉に行くということも書いてあるのです、10月の予定はなしと。ところが、この表（巻末資料1参照）をご覧くださいと分りますように、10月6日から9日まで新潟に来ていることが分ります。大正2年10月1日に鎌倉を発ちまして、このころ「ホトトギス」の中心になっておりました渡辺水巴（すいは）という俳人でありま



高浜虚子

すが、この方と一緒に長野のほうへ出かけるわけです。長野の神津雨村という人と軽井沢で別れまして新潟にやっ来てまいります。篠田旅館に泊まっている。それを迎えに来たのがさきにも触れた出雲崎の佐藤耐雪さんです。

新潟から弥彦へ行くわけですが、今のように簡単に自家用車でさっと行けるような時代ではありませんから、今はもうございませぬけれども、まず篠田旅館に泊まることになります。篠田市長の本家であります。今のオークラホテルからちょっと上（かみ）にあったのですが、そこへ泊まったのです。そのときのことは、佐藤耐雪さんの記録にはあったのですが、本当に泊まったかどうかということがよく分からなかったのです。ところが最近、三条で、このときに書いた短冊を持っている人がいまして、その裏を見ましたら、大正2年10月7日に篠田で書いたと裏書きをした虚子の短冊がありました。そこに、「寺に幽せられて庭の芙蓉に悲しむ」と、五・七・五にはなっていない俳句なのです。

虚子という人は人の扱いは非常にうまくいったのです。耐雪さんは碧梧桐とも親しかったので非定形の句も作れることを示したのです。篠田旅館で会った人といいますと、まず能の関

係の人です。虚子の家は松山藩の能と関係しており、その能の関係で謡があったものですから、新潟の謡の家元みたいなことをやっていた江口治作という方がいました。その人と能の話をするためにその人を呼んでいる。それから佐藤耐雪が、もう一人、先ほど申しました小林鳥啼（存）を、そのときは「新潟新聞」の俳壇の選者をしておりましたから、それを呼んでいます。それに松山の自分の中学時代の絵の先生が新潟師範学校の教師をしてきておりました、西垣維新という方です。この方が新潟におられましたので、前の恩師に会うということもあって、静養かたがた新潟に来られたわけであります。この方は新潟で亡くなられて、お墓は紫雲寺の墓地にございます。昭和19年まで新潟で生きておられました。翌日、弥彦を経て出雲崎に行って、そこに泊まります。それから佐藤さんのところの俳句会に加わるわけです。そのときにこの句は、「ホトトギス」の系統からいうと17文字になっていない俳句なのです。

というのは、虚子先生という人はそういう点では人を扱うのは大変上手なので、相手が梧桐に心酔した鳥啼であると、それに対するちょうど合うような句を作っていくという如才なさがあるわけです。面と向かってお前だめだということを決して言われないのです。そういう点では人の扱い方が実にうまいですね。みんな手の内に、我々でもそうでしたけれども、お釈迦様の手の内に孫悟空が飛んでいるみたいに、みづほも素十はじめ弟子たちはみんなそうやられたのです。虚子というのは非常に苦勞した人なのです。子規が死んでから、「ホトトギス」が俳句の雑誌として成り立つまでは、何とか雑誌を売らなければいけない。ところがそのころ「ホトトギス」という雑誌は1冊20銭だったのです。ページが90ページから、多いときで200ページくらいになるのですけれども、200ページのときは特別号ということで40銭になるわけです。そのうち、俳句はたった14、5ページしかないのです。あとはほとんど小説です。ただの文芸雑誌でした。

例えば『我が輩は猫である』とか『坊っちゃん』といったものはみんな「ホトトギス」に出て、それで「ホトトギス」はようやく息をついたわけです。泉鏡花とか、小宮豊隆なんていう方もこういうところで小説を書いておられたわけです。虚子は何とか雑誌を売らなければならない。2,000部くらいしか出さないのですけれども、20銭で2,000部ですからいくらにもならないわけです。それで7人も子どもを育てていかなければならないのですから、大変なのです。

大正2年に、「ホトトギス自体は虚子そのものである」という宣言を出して、雑誌に高札というのを書きました。昔の奉行所からのきつい命令のように、虚子は「ホトトギス」そのものであるということを書くわけです。どうして苦勞したということの後で述懐しているのです。昭和13年ころになるかと思いますが、その「ホトトギス」の500号の中に、「子

規のひとりごと」という文章があるのです。それを見ますと、「私は大学を出ることもできなかったし、文芸でも失敗した。だけれども、「ホトトギス」で飯を食って家族を養うことを決心した」ということを臆面もなく書いているのです。「私は大学も出ていなかったから、官吏にもなれないし教員にもなれない」と言って、新聞社の俳句の選をしていたわけですが、新聞記者として碌碌(ろくろく)とするような気もない。どうもうまくいかない。「私はこの「ホトトギス」という雑誌を生活の資を得るためにやる」ということがはっきり書いてあります。このことを昭和 13 年に 500 号になってようやくはじめて、「ホトトギス」が安定したときに書いたわけです。そういう点では正直に告白しているわけです。みんな、俳句は芸術のためだとか何とか、文学のためとかうまいことを言っていますけれども、「まんま食うためにやる」と自分で言うというのは勇気のいることで、普通はなかなか言うことができないものです。

一寸話がそれますが、考えてみれば、医者だってよくよくみるとまんまを食うためにやっているわけですよ。そうだから、健康保険の点数なんかにわーわー言うわけないんですよ。「医は仁術」「治病最優先なり」なんて言っているけれども、名目はそうですけれども、実際に家族を養わなければならない。子どもを私立の医科大学にやらなければならないとすると、私立の医大は官公立よりお金がかかります。入学するときに最低 1,000 万円いるわけですから、そのためにはやっぱり一生懸命稼がなければならない。それには、官公立の給料の少ない勤め医者をしているよりも開業しなければならない。開業すれば、収入も少し多くなると時間的にも楽になる。こうゆうことはだれも表には出せませんが、恐らく開業しているお医者さんの心の中には、半分くらいはいい暮らしをしたいという気があるのではないかと私は思っています。

私はそうなのが嫌だから、うちが寺だということもありますし、次の代も医者にならなくてもいいということもあるので、開業もしませんでした。俳句でもしていようと。しかたがないから俳句の手伝いでもしようかと思っていたところが、前の人放つたらかして辞めてしまうものですから、しかたなくやっています。多少のお手当はいただいていますけれども、本当にタクシー代にもならない。こういう講演にしても、東京へ行けばこの 20 倍くらいもらえるのですけれども、雀の涙の講演料でして、社会奉仕と思ってやっているわけであります(笑)。だからといっていい加減にしゃべるわけにはいかないのです。人間、本音を言うというのはなかなか難しいのです。寺だって、葬式があればいいと思うけれども、葬式があるようではその家の方々は大変困るわけですからね。

そういうことで虚子先生は大変な苦勞をしてやってきたわけです。しばらくしてどういうことが起きるかといいますと、その後、大正 4 年にも先生が来られるのでありますが、そのときには、1 句の記録しかないのですが、「初秋の雲遠近や信濃川」という、あまり上手では

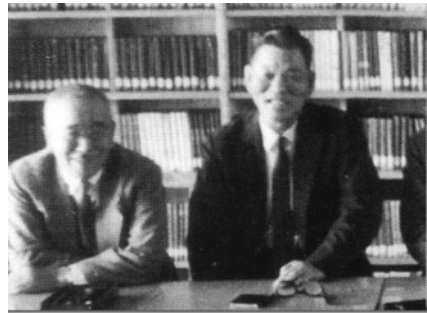
ない句です。そんな句を発行所へ電報を打っているという記録があるのです。その後、大正13年においてになっているわけです。これはなぜかといいますと、新潟医学専門学校ができたのが明治40年でありますが、その後、大正10年になりますと医科大学に昇格いたします。日本の医学は専門学校教育ではいけないということで大学に統一しようということになり、6つの都市に6つの医科大学をつくるわけです。そのときに池田廉一郎という校長がいたのですが、学長をやるために、助教授はいたが力が足りないからということで、東京帝国大学の母校へ外科学の助教授を頼むわけです。そこで中田みづほ先生という俳句も上手な秀才が赴任してくるわけです。

中田みづほ先生が赴任してきまして、はじめは俳句どころではなく、俳句をやろうという気は少しはあったのかもしれませんが、忙しくてとてもそんなことをしていられる状態ではなかったわけです。ところが、後で写真も出ると思いますが、笹岡村、今の阿賀野市笹岡の乾物屋、塩引屋のおんさま（次男）の佐藤念腹という人がいたわけです。この人は大正2年ごろから「ホトトギス」に俳句を投句していたのですが、投句しましても1句も入らないのです。大正11年になって初めて1句入った。「ホトトギス」というのは俳句の一派はまだそれほど力があつたわけではなく、大正4、5年ごろまでは全国に470人くらいしか投句者がなかつても、まだそれよりちょっと多いくらいの状態だったので

中田みづほ

どのくらいの選句をしたかという点、虚子はそのうち雑誌に載せる句はわずか120句。4,700の中から120句しかとらないのです。だからページ数としてはいくらか少ないわけです。雑詠選というのが「ホトトギス」の雑誌の後ろにほんの3ページくらいしかないわけです。あとは小説で、虚子の俳句の講義や地方の俳句の記事しか載っていなかった。新潟県というのは読者が非常に少なくて、みづほ先生が来られる前は、長岡の在の王寺川というところがあります。そこに、本名はよく分からないのですけれども、長部朧星という人がいまして、この人が6、7人の小さな句会をやっては「ホトトギス」にその会のリポートを出していて、それが載っているくらいで、あとはほとんど「ホトトギス」との関係は絶っていたのです。

す。昭和 36 年に日本に帰ってきたときに、これは大畑
畑小学校の図書室で撮った写真ですが、これが佐藤念腹
さんという人です。



中田みづほと佐藤念腹

この人は変わった人で、「ホトトギス」を見ると、百
何十人の中に、中田みづほとは何かは書いていない。「
越後・みづほ」としか書いていない。そういうものしか
ないものですから、「ホトトギス」の発行所へ会おうと
思ってどういう人かという手紙を出して、初めて自分も

1 句とられたものですから、住所を知りたくて「ホトトギス」の発行所へ手紙を出したわけ
です。ところが発行所からは、新潟市の医学士だということだけで、どこに勤めているとも、
番地も書いてない、つれない返事のはがきが発行所からきたのです。

そこでそのまま、「新潟市 医学士 みづほ様」という手紙を出したのです。それがちゃんと
届いたんですね。結婚間もなく、新潟に来たばかりの妻（しげこ）さんという奥さん
が、主人が帰って来ると笑い転げて手紙を差し出したそうです。見たら、念腹という変な名
前の人だった。訪ねていいかと書いてありまして、じゃあ日曜日に来いと言ったら、毎日曜
日のように来るのです。あのころは、笹岡から水原へ出て、水原から新津を回って出て新潟
に来るわけです。原稿用紙に俳句をいっぱい書いて持ってくるわけです。月曜日の講義の用
意をしようなんて思っても全然できないほど、1 日じっくりいるわけです。家業が乾物屋で
すから塩引きの少しは持ってきたりするものですから、むげに断るわけにはいかないと思っ
ているうちに、何とか句会をやりたいということで、この人が中心となって、新潟への途中
の亀田に佐藤暁華という人がおられましたので、今度は暁華さんのところで降りて、その人
をつついて、何とか句会をやろうということでグループが少しできてくるわけでありました。

大正 13 年にみづほ先生をつついて高浜虚子先生を呼ぼうということで、新潟にお呼びする
わけです。それで虚子が新潟へ来ることになったわけです。新潟医科大学に池原記念館とい
うのが昔あったのですが、そこで大正 13 年 7 月 10 日、県下の俳人を集めて句会をやった。
そのときは 45 人の俳人が集まったわけです。そのときのきっかけは、そのころの長老である
出雲崎の佐藤耐雪さんのところへあいさつに行こうということになっていたのです。どうし
てかといいますと、大正 12 年 9 月 1 日に関東大震災に起きます。「ホトトギス」の発行所は
つぶれなかったが、虚子の自宅はつぶれてしまいます。自宅に持っていた「ホトトギス」の
バックナンバーが全部焼けてしまいます。佐藤耐雪さんというのは本屋ですから、「ホトトギ
ス」が発刊したときからの雑誌を持っていたわけです。それが二百何十冊あったそうですが、
それを全部高浜虚子先生に寄付したのです。今、高浜虚子記念館にあるのは、佐藤耐雪さん

が寄贈したものが残っているわけであります。そういう点で非常に恩義がある。そういう点では虚子先生はきちんとした方でありますから、そのお礼とあいさつに行こうということで、新潟経由で出雲崎を訪れ、そこでも句会をやって東京へ帰っていったということなのです。その機会を強引に作ったのは念腹がみづほ先生をけしたててやったのです。

県内に4日間おられたわけですが、9月10日に新潟市の医科大学の池原記念館で俳句大会をやりました。そのときの席題が「萩」だったわけです。汽車の中でいろいろと話をしたところ、会を「真萩会」としようということで、「まはぎ」という名前をつけられたわけであります。実際に雑誌が出るのはこれからずっと後になりまして、昭和4年になるわけですが、それまでの句会の原本が中田先生から茂野六花先生のところへ渡って、その後亀田の郷土資料館（現江南区郷土資料館）に茂野先生の末亡人翠さんが寄贈されたわけです。



「真萩」の原本

（江南区郷土資料館蔵）

そのときに新潟で作った句が「千二百七十歩なり露の橋」ということで、その短冊がみづほ先生のところにございました。これはまだ売られないでお宅にあると思いますけれども、裏書きした文字もそっくり彫って、今、ホテルオークラの前に句碑がございます。新潟俳句会が建てたわけでありますが、新潟俳句会の字などは、皆さんに配りました別表にある、本田空也さんという方が書家でありましたので、会の名前を書いたのであります。

その後虚子先生は何回かこちらへ来ておられます。亀田へ昭和12年に初めて来ておられます。このときは亀田へ来たといっても、石山村の早津兵左衛門さんところですよ。これは佐藤南瓜さんという俳人がおりましたけれども、その親戚にあたるようであります。そこでの句会が最初の句会であります。その後、何回か来られまして、佐藤暁華さんの炉、「夏爐の火燃えてをらねば淋くて」と詠まれ、円満寺にこの句碑があるわけであります。

その後、ときどき来られたのですが、昭和13年にも来られました。新潟大学の文化講演のときにも来ておられます。佐渡へ回って、新潟では「砂丘長し春の海岸線もまた」なんていう句を作っておられますけれども、その後に、秋田のほうを回って、昭和14年5月27日から29日まで来ておられるのです。このときは北山の村木花圃で句会が行われるわけであります。このときには、亀田の句はあまりよくないのですけれども、瀬波で作った句に「飛島に夏の日落ちて夕焼けの」という句があるのです。ところが、村木花圃に行ってみんなで俳句をやっていたときに、ちょうどホトトギスが来て鳴いたのだそうです。これはみづほ先生が書か

れているのですけれども、ホトトギスがキョキョキョシセンセイと鳴いたというんですが、おもしろく書かれたのか、本当なのか、私は一緒に行ったわけではないから分かりませんが、みづほ先生がそういうことを書いているのです。「ホトトギス」の主宰の虚子が来た日にはもってこいの日和であったということが書いてあるのです。私が俳句で亀田に来たとしても、ヒヒヒヒヒロシセンセイというわけにはいかないんですね（笑）。

昭和 19 年にも来ておられますが、これは日本文学報国会の俳句部長をしておりましてから、傷病兵の慰問に結核療養所に来ておられたわけです。これがきっかけになって、「松の花」という今も続いている雑誌の基になる句会ができるわけであります。そのときに新潟の芸者衆も一緒に連れていっています。素十先生、みづほ先生も一緒に連れていかれました。このときは亀田には寄っておられません。

9 回目に来られたのは昭和 20 年 6 月 11 日でした。これはなぜ来られたかといいますと、虚子先生の娘さんに章子さんという方がおられます。6 女だと思いますが、章子という方の夫が上野泰という、その当時陸軍の軍人になって満州の部隊になった配属になって、家族を連れていったわけです。ところが、どうも危ないということで家族だけを船に乗せて日本へ帰したわけです。昭和 20 年 6 月ですから、日本海にもいるらしい潜水艦がうろうろする時代です。ドイツはもう負けてしまいましたが、ロシアも参戦するらしいということで、満州から、生まれたばかりの美子という幼児を連れて帰ってきました。後でこの美子さんは「春潮」という俳句雑誌を主宰する人です。軍人さんの家族だけは帰すということで、月山丸という羅津（らじん）から新潟に来る定期航路がありました。それに乗って新潟の港にほうほうの体で降りたわけです。

医科大学に高野先生がいるということだけは知っていたわけです。上陸してうろうろして、輸送する事務所に行ったら、陸軍の曹長がおりました。「電話を貸してください。大学の高野先生にかけてください」と言いますと、その曹長は、「高野先生ですか」と言って、ポケットから「ホトトギス」の雑誌を出して、「高野先生はよく知っています」とのこと。矢野義山という高知県出身の陸軍の曹



高野素十

長だったわけです。「すぐに連絡しましょう」ということで高野先生に電話をかけたのです。法医学教室にいた高野先生がちょうど出て、技術員の永松西瓜という小使いさんと、新潟にかき正という料理屋がありますが、行きつけのかき正さんの橋本春霞さんという方が、ちょうど埠頭のところに食堂を出していたわけです。そのときちょうどそこに春霞さんがいたわけです。高野先生がかき正に電話をかけて、「今、そこにいる上野章子の母子と一緒に運んで

こい」ということで、あのころはタクシーも何もないですから、リヤカーに板を敷いて、それを持って中央埠頭まで行って、それに親子を乗せて大学に連れてきた。

そうしたら、その美子という子が、今はもう 60 幾つになっただけですが、生まれて 2 か月くらいしか経ってなくて状態が悪い、熱が出ていました。すぐに大学の小児科に入院させて、和久井豊教授という小児科の先生に助けてもらって、小諸にいた虚子先生のところに電話したら、ちょうど疎開していた晴子さんという 5 女の方と一緒に新潟にやってこられたわけです。本当にありがたかったということで、状態がよくなって帰っていかれたわけです。そのときに、子どもが治療している間、ちょっと俳句をやりたいということで、戦争中でしたけれども、素十とみづほなどから味方村の笹川邸に案内されます。そこで田植えを見させて、田植えの句を作ったわけですが、そこにお礼の俳句を残したわけです。ちょうど夏ですから、「**推落景掃き悠久の人住めり**」というのをそのときに作られたわけです。後でこれに署名をされて、今、句碑になって笹川邸に残っております。そのときに新潟の俳句をする芸者衆も一緒に連れて行って慰めたということです。このときは素十先生の家に厄介になって、翌日に帰っていかれたということがあるわけです。

その翌年になりますと、後で年表をご覧になると分かりますが、昭和 21 年 4 月 18 日に小諸へみづほ、素十、春霞が訪ねていったのですが、身体にかゆかゆの湿疹ができたり、下痢があったり、よく見るとどうも栄養失調みたいな状態だったものですから、新潟で検査しましょうということでお連れして、田坂内科に入院されたわけです。入院されても、そこで句席を開いたのが残っています。そのときは「**大学は花にうずもれ日曜日**」という句を作っておられます。このとき私は復員して大学に帰っておりまして、みづほ先生と素十先生が両脇に抱えるようにして先生を田坂内科の病室へ連れて行かれるのを後ろから見ておりました。腰が痛いというので、整形外科にも来られて、私は教授の脇で物を書くためにいたのですが、虚子先生の裸を私は見えています。後ろのほうしか見られなかったですけども、痩せこけて、お年がお年でしたから、たしか 73 歳くらいですから、パツツとなんかしていないですね。

私も今そうですけれども、女房に言われるのです。風呂から上がってくると、死んだお父さんとそっくりになってきたと。後ろから見ると尻がすらっと下がってきて、昔はもっとパツパツして毛が生えていた。このごろは頭の毛だけでなく、まつ毛までもなくなってきましたね。この前、まつ毛があんまりないもんですから、孫がつけているまつ毛をつけてみようかと思って、鏡に向かってつけてみたら、とてもじゃないけれども、あんなのはつけられない（笑）。

また、話がちょっとそれましたが、俳句に戻ります。その年の 9 月 18 日から 20 日にかけて新潟に来られまして、これは「ホトギス」の 600 号の記念句会がありました。行形亭で

やりまして、そのときに、「新潟は松の間に百日紅」という句を作っておられますが、このときに虚子と同じような句を作った、ここに来ておられる安田さんのお父さんの安田巨風という方がおられたのですが、その方と同じ句だったのです。巨風さんの「きょ」と言おうと思ったら先に「きよし」と先に言われたと。「ふう」と言われるよりも「し」で終わったもんですから、それが虚子の句になってしまったということで、同じ句でもいっぱい作っていれば同じようなものができるわけではありますが、そのようなことで、これが11回目がありました。このときに新潟玉藻会が生まれまたわけです。

それから昭和23年に来られました。このときは新潟玉藻会がありまして、句謡会などがございました。昭和25年には俳誌の「玉藻」の10周年ということで、6月1日に護国神社で句会がございます。そのとき私は欠席してしまいました。当時はとても忙しくてそれどころではありませんでした。



昭和25年6月1日新潟護国神社にて

これが虚子です。ここに立子さんがおられて、ここにみづほ先生、ここに素十先生がおられます。これが亀田の軍平さんという有名な方です。これは赤羽岳王、これが橋本春霞さん、先ほどリヤカーを引いた永松西瓜さん、この前亡くなった浅井八郎さんなどがおられます。

れども、ほとんどみんな死んでしました。ここにおられるのは亀山其園さん、高野素十先生ということであります。

15 回目は句謡会で来られます。そのときは「新潟に知る人多し夏柳」。82 歳のときに来られたのであります。

第 16 回目が昭和 32 年、亡くなられる 2 年前ですが、新潟の室長旅館に泊まれまして、句謡会でお呼びしたのが最後であります。その後に亡くなられるわけです。

昭和 34 年 4 月 1 日に脳幹出血がありまして、意識なくなります。約 1 週間治療されたわけです。新潟大学で中田先生の助教授だった田中憲二先生（俳号 憲二郎）という、後で順天堂大学に行かれた教授が診ておられます。お釈迦様の誕生日の 8 日に亡くなられたわけでありす。

亀田の俳句

虚子先生に心酔する人が多く、新潟の亀田には佐藤暁華さんの炉、亀山其園さんの炉という炉がありますが、これが俳句を非常に盛んにするわけです。実際、亀田の俳句が本当に盛んになってくるのは、戦争中といたしますか、それより少し前の昭和 10 年に高野素十先生が東京から新潟医科大学の法医学の教授になってこられて、亀田にしょっちゅう吟行に来られました。みづほ先生は臨床医でありますから忙しいのでそう来られない。ところが、あのころはまだ治安がよかったものですから、法医解剖なんていうのは非常に数少なかったわけです。大変暇なわけです。そしてまた法医学をやろうなんていう人間はあまりいなかったわけです。手持ちぶさたでしょうがないのです。それで学生などを連れてきていました。それがだんだんと高じていきました。また亀田の人も厚遇してくれるものですから、非常に喜んで、酒がいっぱいありましたね。酒飲みで賑やかなことが大好きで、炉というものが大好きでした。

先生は、「百姓の血筋の吾に麦青む」という句があるのですが、茨城県の山王村の百姓の出なわけです。百姓といっても小作ではなくて、かなり大きなお百姓であります。そこで生まれたわけですね。行ってみますと、新潟と同じように田んぼの真ん中に家があるのです。その部落には 17、8 軒しかないのです。ほかには墓地があったり、お宮があったりしました。私が行ったのは今から 11、2 年前ですけれども、まだそんな状態でした。というのは、素十先生の実家は、年が 50 歳くらいの跡継ぎがいるのですけれども、嫁が来ないというような村です。新潟の田舎に似たそういう所で生まれた方です。

みづほ先生は津和野藩という森鷗外と同じ城下の出身の、鉄砲方という武士の家に生まれたわけですね。お父さんは苦勞して西洋医者修行した方でしたから、非常に品格よく育てら

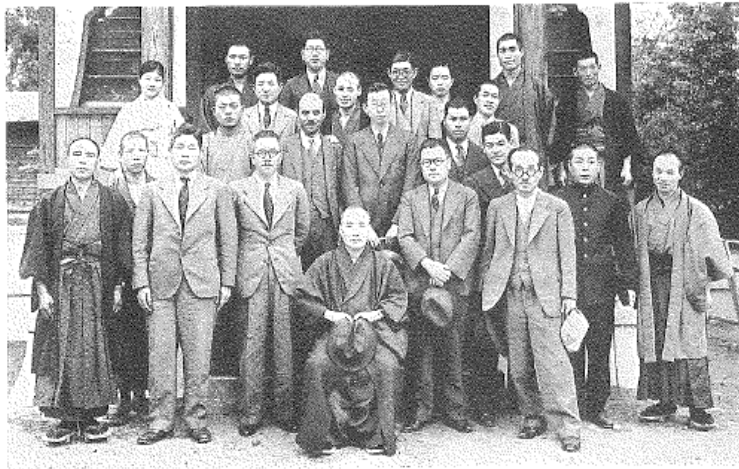
れていたものです。酒を飲んでわいわいさわぐ、そういうところに碎けて入ることがなかなかできなかったようです。臨床医ですから忙しくて来れないということで、昭和10年以降はもっぱら素十先生の亀田訪問の頻度がものすごく多いわけです。

そういう点では亀田の人も喜んだのです。そのころ亀田の船戸山の七賢とって、どれほど賢かったかは分かりませんが、七賢と言われた人がおりました。名前はよく分からないのですが、やぶの神主というのは、恐らく玉木豚春ではないかと私は思うのです。やぶの神主という人がこの名前をつけたらしいのです。それを見ますと、渡辺軍平さんという方が布袋様です。玉木豚春さんは寿老人、坂井魯郎さんというのは、玉木さんと同じく亀田の小学校の校長先生だったのですが、坂井魯郎は恵比須様であると。佐藤暁華さんは大黒様であると。樋口盞字さんは毘沙門天であると。亀山白頭さんという方がおられましたが、これは福祿寿であると。亀山其園は弁天様だと。後になってみると、どうも弁天様だとは思えませんけどね。男だか女だか分からないような格好してましたからね。そういうことで、亀田の七福神がいました。七賢ともいう、だれがこれをつけたのか分かりませんが、そういう俳句仲間もいたことがありしよっちゅう来ていました。

女性の方では、一番初めのころには、昭和10年ころから亀山なおさんという方が、俳句はやめていましたけれども最近まで生きておられたと思いますが、この方が初めに「まはぎ」に出ております。昭和12年ころから亀山其園さんの名前が出てくるようになります。一番亀田の人の名が出てくるのはやはり戦争中と戦後直後です。戦争直後に予科練など、兵隊から帰ってきた人たちが、文化活動というとかやぐざ芝居とか、ラッパを吹いたりジャズをやったり太鼓を叩いたりといったことばかりしているのを、玉木豚春先生が、「そんなことをしていないで若い者はもっと教養をつけなければいけない」ということで、先輩の白頭さんや先頭さん、あるいは水風さんや、軍平さんなどの先輩方が少しおられたわけですが、佐藤南瓜さん、稻舟さん、樋口南盆さんたちが引きずり込まれて、船戸山の公民館でしょうか、小さな建物がありましたが、そこに玉木先生が住んでおられたものですから、しよっちゅう夜になるとそこに集まって俳句会をやっていました。

亀田の青年たちがそうなりますと、だんだんと人を呼ぶようになって、また新潟の人たちがそういうところへどんどん来るということで、昭和22、3年ころになるとそういう人たちの集まりがいくつもできたわけです。

これが軍平さんだと思います。これが佐藤暁華さん、これが玉木豚春という頭のはげている方です。これが暁華さんのせがれさんで佐藤仁也さん、これが其園さんですね。これが姥ヶ山の阿部耕碩さんという方です。これが虚子先生で、これがせがれさんの年尾さんです。



昭和13年5月 亀田通心寺にて



昭和13年5月亀田通心寺にて

これが浜口今夜先生。浜口今夜先生とみづほ先生と素十先生は、越後の三羽鴉と言われたのです。教授の中で仲間になったのは及川仙石という教授、あとで京都府立大学の教授になる小片村酒という方、これが順天堂大学の教授になって、虚子の最後の脈を取られる田中憲二先生、これが長谷川草也さんという方がここに写っているわけです。これは山内大刀先生、その同級生あたりはみんないます。これは非常に貴重な写真であります。

このように16回も来ておられるのでありますが、幸いなことに、碧梧桐が回っているところには亀田には全然来てくれなかったということが、亀田には非常に幸いしたと私は思います。昭和16年に教授会の席で、ちょうど僕が医者の学校に入ったときであります、このときに、有山登という後に順天堂大学の学長をされる方ですが、この方は漫画が上手で、教授会の席でこれを書いたのです。うまいんですね。浜口一郎

(今夜)先生は、昭和18年3月1日に亡くなられたときに、私は2年生の終わりだったのですが、瑞光寺で葬式がありまして、私たちは学生として参列しました。そのときに虚子先生が作られた追悼句が「



有山 登 (1889-1989) 昭和16年
京都府立医科大学
昭和16年

三羽鴉

三羽居し春の鴉の一羽居ず」と。それでなおさら三羽鴉という名前が有名になったのです。その後は二羽鴉になってしまったわけですが、今は無鴉になってしまいました。

そのくらい立派なリーダーが2、3人いると俳句が盛んになるのです。リーダーというのはしっかりしなければだめだと思うのですが、私なんかは力が足りませんが、根の続く限り私はやりたいと思います。機関誌になった

「まはぎ」が100号になったときに、虚子先生がこういうことを言っておられるわけです。「まはぎ」の100号に書いてあるのですが、「なつかしい情緒が後をひく」ということで一文を寄せておられます。



浜口今夜

「みづほ、素十の両君に感服することは数々あるが、その中で一つ最も感服することは、亀田の諸君をはじめとして新潟在の人々の忠実なお弟子を育て上げたことである。育て上げたばかりではなく、その師弟の交わりの美しいことである。

「まはぎ」がきたときは大概せわしい用事をしている時でもすぐに手を取り上げて通読する。20分か30分すれば卒業するような薄ぺっらなものであるが、それを読了した時の感じはなつかしい情緒が後をひくのである。

その情緒が亀田俳人らの質朴な性質を反映してその師弟関係を形づくったものと思う。

その情緒はひとり新潟近郊のみならず、遠く南米ブラジルの念腹君あたりにも光被しているようだ。

そうだ、昔も今も本当に人に教ゆる人は、何も多くのものに教えようとしない。少数のわずかな人に教えて、そのわずかな人が順々に多数の人に教えるようになるのだ。あるいは10年20年100年と経つうちに本当の俳句の道は新潟よりはじまったということになるのかもしれない。

みづほ君等は好んで「まはぎ」を出されたのではないかもしれぬが、自らその所には重大な使命が宿っているように思う。」

このような文章を寄せられています。亀田の人たちへの思い入れは強いのです。ところが、虚子先生というのは非常に如才ない人ですから、どこに行っても同じようなことを言っているんです。今のようにインターネットなどが発達しているわけではありませんから、雑誌だって部数が余計出ているなんて知らないわけです。佐藤念腹への手紙でも、「100年後、

正しい俳句はブラジルから始まるということになるかもしれぬ」と。これからの俳句をしっ
かり頼むということで、どこに行っても似たようなことを言うわけです。人間、そのくらい
上手でないと世の中で生きていられないんですよ。おれは、おれはとか、それはだめだなん
てばかり言っていると、上がり物も何も少なくなつて、餓死してしまうのであります（笑）。
どこかの検事さんみたいになってしまうわけであります。

それはともかくといたしまして、虚子先生を慕う人も多かったわけです。亀田の人たちは
傘張りが多かったですからね。あれは大体貧乏人がする仕事でありまして、裕福な、地主さ
んなんか傘なんか張らないですからね。昔は貧乏浪人なんていうのが傘を張っているわけ
ありますが、貧乏でもそれなりの仕事、それなりのことをきちんとしていくというのが、都
会の裕福な人にはない非常にいいところだと思いますし、そういうことがいい俳句を作る基
本になるのだらうと思います。まず俳句以前に、人間ができないといいものができないとだ
めだから、俳句ができない人間というのはあまり人間がよくないと思って間違いないとい
うことです（笑）。

私はそのように、独断と偏見を持って考えるわけですが、非常に多くの俳人の方々が亀田
から出ました。このほかに、坂井要一さんや村尾ヒナさんなどの方々が10人くらいおられま
すけれども、これまで主になってやった方々というのは、大体この表に並べた方々でありま
す。大部分の方はもう亡くなっておられますが、ここにある名前で、生き残りが少しおりま
すけれども、この人たちからもっと頑張ってもらって、少しずつ周辺から、虚子先生が言わ
れるように、俳句をもっと続けていけるような状態になっていけば大変いいと思います。昭
和4年4月21日の大暴風雨の中、亀田の青年会議所に集まって「まはぎ」の創刊の相談をし
たわけでありまして。そういう熱心さというものは、時代を経るとだんだん少なくなつてき
て、ばからしいこととしてしまいがちです。亀田の俳句の小さなグループができてはつづれ、で
きてはつづれいたしますけれども、今、主になってくれている人たちは、亀田の先輩の方々
から育てられた人の残党であります。また新しく俳句をたしなみ育てていこうという方が育
ちつつあります。これからでも遅くない新しいグループを作してほしい。

大正から昭和2年にかけては、この地区に10くらいの小さなグループがありました。
それが統合されたりしまして、昭和9年ころになりますと、いろいろな句会ができます。「暁
句会」などというものが主になって「まはぎ」を支えてくれましたし、「花太藺句会」という
ものがありました。教育者であった玉木豚春先生は、諏訪神社にある「**豊年の田に一礼し刈りば
む**」という句碑がございますけれども、「亀田校句会」というものや、おかしな名のあったも
のには、「ばいきん句会」なんていうのがあったらしいですね。これは白頭さんや軍平さん、
南瓜さんという人たちが集まった、戦後の句会であります。このようないろいろな句会が回

を重ねて俳句を作っていました。その証拠をきちんと残してほしかったと思います。

意外と記録が残っていないのが現状であります。この表（巻末資料2参照）の中に、大体どのような句集を生涯まとめられたかというのが出ておりますけれども、私が残念に思うのは、黒い丸印がついていると思いますけれども、亀山先頭さんや亀山白頭さん、渡辺軍平さんなどという「ホトトギス」で非常に活躍した方の句集がないのです。作品をばらばらにしか見ることができない。これを後輩の我々としては何とかまとめてあげたい。あるいは残しておきたい。これは亀田の俳諧史には欠かせない方であります。樋口蓋字さんもできていないと思いますが、『花太蘭』などの集合句集の中では若干の句は見ますけれども、全体像が分からないということになりますと、これからますます分からなくなりますから、こういうものが何かの企画できちんとできることを私は希望しているのです。句碑を建てるのもけっこうでありますけれども、句集という集大成したものをきちんと残していくということは、図書館なりの使命であり、また資料館の使命ではないかと思います。そういう企画が公的な機関であったり、あるいは個人的な発想があつてよろしいのではないかと私は考えております。私が生きている間に何とかそういうものが目の目を見られればいいと思うのですが、これからでも遅くないと私は思っております。

俳句というのは日本人であればだれでもつくれるはずなのです。上手、下手は別問題であります。下手くそでも、やっていけばうまくなるのです。年をとってくるとだんだんよくなるのです。よくならないのは顔の形だけでありまして、脳の中というのは意外といつまでもぴかぴかしているものであります。皆さん方も、これからでも遅くないから、俳句の道を歩いていていただければ、先輩方も喜んでおられるのではないかと、あるいはここへ来られた虚子先生もお喜びになっているのではないかと思います。

亀田図書館に期待する

俳句に関することで、大変雑ばくな話でございましたけれども、いろいろな方の業績をもう少し詳しくお話ししたいと思うのですが、虚子先生は生涯かけて、芭蕉がなし得なかったような大きな仕事をしております。私はすべて近代の俳句というのは子規、虚子から始まるのではないかという気がいたします。その中の大きな力といいますか、虚子が非常に期待した亀田の文化の中心の図書館の中に、特色を持った一つのセクションができるということは大変うれしいことであります。俳句記念館などが中央にもございますけれども、地方のセンターができるということは大変おめでたいことだと思います。そういうときに私が呼ばれて「吹かせて」いただきました。多少、記憶も怪しくなっておりますけれども、生きている間、

この亀田に通って、亀田に本拠がある「雪」という俳句雑誌がございますので、それを足場にして、何とかの力になりたいと思います。

戦後、亀山其園さんのところへ通って、俳句のリハビリをしたものですから、「蒲原の野郎、亀田に“これ”（子指を立てる）持っているんじゃないか」なんて言われましたね。「亀田にそれほどいい女はいないよ」と。そのような冗談を言っておりましたけれども、とうとう毎月通うことになってしまいました。昔から亀田は虚子先生からも非常に期待されたところでございます。その証拠は句碑の道であるかと思います。新潟県でもそういうところはいろいろとありますけれども、その土地の人だけというのはここ1か所だと思います。新潟県で句や歌の碑がいっぱいあるのは、五頭山のやまびこ通りが一つあります。これはごちゃごちゃでありますけれどもあります。佐渡に佐渡碑林といいまして、鷺崎の山の中に、これもいろいろなものが建っています。佐渡に來た人だけのものでありますが、亀田は亀田の人たちのものだけでありますが、これがもっと全国に知られているような亀田ゆかりの虚子、素十、みづほ、念腹、今夜というような俳人のものも建っているようなことになったらいいかなと思っている次第であります。

何といっても、暁華さんというポイントがあり、玉木豚春さんという人があり、また坂井魯郎という教育者があって、若い人たちを刺激した効果というのが出てきた結果ではないかと思います。今後は、俳句に関するコレクションが中心となる亀田図書館がますます重要な資料の蓄積場になっていって、利用されるよい場所になり、亀田から県下に俳句を発信する中心となってほしいと私は思います。そういうことを祈念しながら講演を終えたいと思います。皆さん、大変長い時間ありがとうございました。

【巻末資料】

資料1 『虚子と越後路』（新潟俳句会編）より

資料2 「亀田郷の主なる俳人たち（抄）」（蒲原宏作成・2012. 10. 5）

資料3 講演会で紹介された俳人

資料4 講演会のチラシ

資料5 講演会と展示会の看板

資料6 講演会の様子（参加105人）

資料7 展示会「俳句の里—亀田郷と俳句—」

巻末資料

資料1 『虚子と越後路』（新潟俳句会編）より

年号	年	西暦	月 日	事 項
大正	2	1913	【10月6日～8日】 ・10月1日 ・10月6日 ・10月7日 ・10月8日	(1) 高浜虚子（1874～1959）新潟市を訪ね、弥彦をへて出雲崎町に佐藤耐雪を訪ねる。 その後昭和32年まで16回にわたり新潟県を訪問。 ・午後8時鎌倉発、上野停車場に水巴（注 渡辺水巴）あり、10時30分共に乗車（中略） ・水巴、雨村（注 神津雨村）と分れ単身越後に向かう。夜9時、新潟篠田に投宿。 ・新潟にあり。佐渡曇りにて見えず。夜雨。 ・出雲崎に向かう。途中弥彦神社参拝。 ・この夜、出雲崎、佐藤耐雪庵泊。
	4	1915	【8月10日～17日】 ・8月10日 ・8月15日 ・5月17日	(2) 高浜虚子来県（10日東京発17日帰京・岩越地方への旅中） ・発。岩越方面に旅行。 ・発行所例会。新潟より句を電報す（以下略）。 ・帰京。
	13	1924	【9月8日～12日】 ・9月8日 ・9月10日 ・9月11日 ・9月12日	(3) 高浜虚子、新潟市及び出雲崎町を訪ねる。9月10日夜の新潟市新潟医科大学池原記念会館での俳句大会の席題「萩」であったことに由来し新潟の俳句会を「真萩会」と命名した。昭和4年創刊の中田みづほ主宰の俳句雑誌「まはぎ」の名はこのことに由来する。 ・発、北陸旅行。 ・新潟医大、池原記念館における俳句会。会者45名。みづほ、念腹（注 佐藤念腹）等。 ・会終わって鍋茶屋にて十余人と会食。新潟美人の踊を見る。 ・早起 信濃川畔漫步。露深し。（「千二百七十歩なり露の橋」） ・同日、午前8時40分越後鉄道に乗って弥彦神社に詣でる。耐雪東道。みづほ、今夜（注 浜口今夜）、圭石（注 木村圭石）、念腹等と同行。それより一行出雲崎に向かう。四水（注 西沢四水）の居に至る。佐渡ヶ島に対した布袋屋にて俳句会。会者18名。宮川町の吉田月我と会す。 ・雨中良寛堂を訪ね、耐雪居を過ぎ、金沢に向かう（後略）
	6	1931	【10月15日～16日】 ・10月15日 ・10月16日	(4) 高浜虚子、高田、直江津を訪ねる。高田市にて「客観写生に就いて」の講演あり。 ・新潟県高田より五智海岸和倉楼に遊ぶ。 ・糸魚川・親不知を過ぐ。

年号	年	西暦	月 日	事 項
昭和	12	1937	【1月2日 ～3日】	(5) 高浜虚子、新潟市を訪ねる。石山村吟行。早津兵左衛門宅、武蔵野探勝会主催。 ・武蔵野探勝会新潟行き。篠田旅館泊。みづほ、素十（注 高野素十）等の歓迎を受ける。
	13	1938	【5月15日 ～19日】 ・5月15日 ・5月16日 ・5月17日 ・5月18日 ・5月19日	(6) 高浜虚子、新潟市・佐渡・亀田町を訪ねる。 ・篠田旅館。 ・新潟医大大講堂にて「雑詠選集春之部評釈」の講演。夜、鍋茶屋にて教授有志の句会、歓迎会。 ・おけさ丸にて佐渡へ。加茂湖を経て真野御陵参拝。相川、いづもや旅館泊。 ・鉱山一望。七浦、河原田を過ぎ黒木御所参拝。両津より乗船。船中一と句会。篠田旅館泊。ホトトギスに掲載すべき佐渡座談会を催す。 ・亀田句会。暁華（注 佐藤暁華）居にて休憩。通心寺にて句会。
	14	1939	【5月27日 ～29日】 ・5月27日 ・5月28日 ・5月29日	(7) 高浜虚子、青森よりの帰路、瀬波温泉・新潟市・亀田町を訪ねる。 ・村上へ出迎へ【注 みづほ、素十他村上まで出迎へ。夫人、章子（注 上野章子、虚子6女）同伴】、瀬波温泉三島屋泊まり。 ・村上より乗車。車中句会。 ・かき正にて昼食、亀田へ。亀田北山 村木花園にて句会。 ・みづほ居を訪れ、妻子夫人の霊前に香を焚かれた後、素十居にて昼食。忙しく一句会。 ・1時15分急行にて帰東。
	19	1944	【10月7日】 10月7日	(8) 高浜虚子・立子（注 星野立子、虚子の次女）らと共に柏崎市大久保の傷病軍人新潟療養所を訪ねる。 ・越後柏崎へ立子と共に。新潟のみづほ、素十、富士子（注 高野富士子）、仙石（注 及川周）等来たり会す。天京荘に泊まる。
	20	1945	【6月11日 ～12日】 ・6月11日 ・6月12日	(9) 高浜虚子、来県。 ・高浜虚子、晴子（注 高木晴子、虚子の5女）と共に新潟市・味方村を訪ねる。大雪崩会に出席。 ・11日満州より帰りたる章子と孫の美子を迎えに晴子と共に新潟に赴き、その夜篠田旅館泊。 ・12日素十、みづほ等に誘導されて味方村笹川只一（俳号 流水）方の大雪崩会に列席し、久しぶりに会員諸君に面接す。小千谷の實花（注 下田實花）、川口の秋庭子（注 星野秋庭子）も来たり会す。

年号	年	西暦	月 日	事 項
昭和	21	1946	【4月15日～24日】 ・4月18日 ・4月19日 ・4月20日 ・4月21日 ・4月22・23日 ・4月24日 【9月19日】 ・9月19日 【9月25日・26日】 ・9月25日 ・9月26日	(10) 高浜虚子、10日間新潟医科大学田坂内科に入院滞在。 ・15日より新潟医科大学田坂病室に在り。高野素十邸偶会。 ・三柏会。病院医務室。 ・引き続き病室にあり。 ・妻忌不参。句をおくる。一句（句省略）。 ・（句省略）。 ・大雪崩会。素十邸。 (11) 高浜虚子、来県。（注 ホトトギス600号記念兼子規忌のため来県。立子同行） ・子規忌を兼ね、ホトトギス六百号記念新潟句会。新潟行形亭。 (12) 高浜虚子、来県。（注 前記600号記念句会のあと秋田、能代を経て再び来県。玉藻会復会。立子同行） ・新潟へ帰る。 ・亀田、其園宅、玉藻句会。（篠田旅館に泊まる） ・直江津五智、和倉楼一泊。ホトトギス600号記念頸城大会。国文・光源寺。
	23	1948	【5月16日～19日】 ・5月16日 ・5月17日 ・5月18日 ・5月19日	(13) 高浜虚子、来県。（注 句謡会・玉藻会のため来県。立子同行） ・新潟玉藻会。亀田、其園居。 ・新潟、新潟赤羽岳王居。 ・新潟句謡会第1日。かき正。 ・新潟句謡会第2日。庫太郎（注 斎藤庫太郎）邸（燕喜館）
	25	1950	【5月30日～6月2日】 ・5月30日 ・5月31日 ・6月1日 ・6月2日 ・6月4日	(14) 高浜虚子、来県。（注 句謡会、玉藻会10周年記念大会のため来県。立子同行） ・新潟句謡会。かき正。29日新潟行き。篠田旅館に泊まる。眞砂子（注 真下眞砂子、虚子長女）、立子同行。杞陽（注 京極杞陽）もまた来る。 ・佐渡に遊ぶ。加茂湖畔、潟上、本間能舞台（本間友英宅）泊まり。 ・佐渡、潟上、本間能舞台滞在。この日新潟、篠田旅館に帰る。 ・新潟玉藻会。新潟護国神社。 ・「小さん」にて昼食。斎藤庫太郎邸（燕喜館）にて句謡会。晚餐。篠田旅館所見5句。（句省略） ・3日帰宅。本間友英（佐渡）に一句を贈る。（句省略）

年号	年	西暦	月 日	事 項
昭和	30	1955	【7月1日 ～4日】 ・7月1日 ・7月3日 ・7月4日	(15) 高浜虚子、来県。(注 句謡会のため、立子同行) ・新潟行。 ・篠田旅館滞在。 ・かき正句謡会。 ・午後帰鎌。
	32	1957	【5月27日～ 29日】 ・5月27日 ・5月28日 ・5月29日	(16) 高浜虚子、来県。(注 句謡会のため、最後の新潟への旅となる。立子同行) ・新潟行。室長旅館に泊まる。 ・赤羽岳王居俳句会。岳王招宴。行形亭。 ・新潟、橋本春霞居「かき正」にて俳句会。春霞招宴。
	34	1959	・4月8日	・高浜虚子（清・1874～1959）没。85歳。 ・在世中に新潟を訪ねること16回。

【参考文献】

- ①『虚子先生・曾遊地めぐりの栞 虚子と越後路』新潟俳句会発行 昭和48年
 - ②『新潟県近・現代俳句史略年表 稿（一）[新潟俳句会 会報掲載]』新潟俳句会発行 平成15年
 - ③『新潟県近・現代俳句史略年表 稿（二）[新潟俳句会 会報掲載]』新潟俳句会発行 平成16年
- を元に亀田図書館が編集。適宜注を挿入し、重要事項については、ゴシックで区別した。

【蒲原宏氏監修 平成24年10月 亀田図書館作成】

資料2 亀田郷の主なる俳人たち（抄）（蒲原宏作成・2012. 10. 5）

西暦	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
●中田みづほ													
1893. 4. 24～1975. 8. 18													
主な句集													
●高野素十													
1893. 3. 3～1976. 10. 4													
●瀧口今夜													
1893. 7. 23～1943. 3. 1													
●阿部 耕碩													
1891. 11. 14～1985. 5. 9													
●佐藤 暁華													
1892. 9. 25～1973. 4. 2													
●玉木 豚春													
1895. 10. 18～1981. 9. 3													
●龜山 先頭													
1905～1956													
●龜山 白頭													
1910～1969													
●渡辺 軍平(江舟)													
1896～1968													
●樋口 漢字													
1905～1961. 4													
●渡辺 水風													
1905. 8. 10～1985. 7. 1													
●渡辺 信一													
1907. 3. 30～1996. 9. 16													
●龜山 其圓													
1916. 3. 31～1980. 11. 9													
●五十嵐 渡河													
1917. 3. 15～1986. 12. 30													
●佐藤 仁也													
1917. 6. 9～2000. 8. 15													
●本田 空也													
1920. 9. 19～1990. 11. 4													
●五十嵐 象円													
1911. 3. 22～1996. 6. 27													
●高橋 向山													
1922. 1. 29～2009. 11. 6													
●樋口 南盆													
1922. 6. 5～2005. 9. 2													
●浅井 八郎													
1922. 1. 29～2012. 9. 2													
●長谷川 耕政													
1926. 5. 2～2001. 12. 7													
●佐藤 南瓜													
1928～2006. 1. 19													
●佐藤 稻舟													
1928～													
●田村 山火													
1932～2005. 4. 7													
●窪田 竹舟													
1936～													
●田村 紅子													
1940～													
●會津八朗朗(鉄杆・八一)													
1881. 8. 1～1957. 11. 21													
●小林 烏崎													
1877. 6. 6～1961. 3. 10													
●佐藤耐雪													
1876. 12. 7～1960. 1. 27													
●佐藤念腹													
1898. 5. 28～1979. 10. 22													
●高浜 虚子													
1874. 2. 22～1959. 4. 8													

資料 3 講演会で紹介された主な俳人

高浜 虚子

本名 清、本姓 池内、祖母の姓を嗣ぐ。明治7（1874）2・22～昭和34（1959）・4・8、愛媛県松山市長町新丁生まれ。

河東碧梧桐と松山尋常中学校、旧制三高、二高と同級。正岡子規の影響で文学活動のため中退上京俳句革新運動に飛び込む。碧梧桐の写実主義、現実主義に対し、理想主義、心情主義の作風をとる。松山で柳原極堂による「ほととぎす」が経営不振のため、これを継承、東京に移し明治31年10月第2巻1号より面目を一新し「ホトトギス」として文芸活動に入る。一時写生文から小説の発表がとなり、俳句雑誌としての面が希薄になったが、碧梧桐の新傾向俳句運動が、全国行脚により、有季定型から季題無用、定型破壊の兆しを憂い、翻然として「春風や關志いだきて丘に立つ」（大2）とともに伝統俳句への回帰運動と擁護論を展開「ホトトギス」を純粹な俳誌として立てなおす。また娘星野立子をはじめ多くの俊秀をその門下から出す。新潟県からは、明治中期すでに會津八潮朗（八一）が投句をい行っていたが、その後佐藤耐雪（出雲崎）、佐藤念腹（笹岡）が大正初期から誌友であった。東大俳句会の創立者の中田みづほが大正11年新潟医科大学に赴任するや、熱心な俳句指導により昭和4年に俳誌「まはぎ」が創刊され、旧派の俳人を次第にとりこみ「ホトトギス」の橋頭堡となった。新潟医科大学教授に高野素十が赴任、浜口今夜と共に「越後ホトトギスの三羽鴉」を中心に虚子の影響は全県下に及んだ。虚子も大正2年から昭和32年の44年間に16回にわたり新潟県に杖を曳いている。昭和34年4月1日脳出血で倒れ同月8日永眠、鎌倉寿福寺に葬る。『年代順虚子俳句全集』（昭15～16）『句日記』（昭5・4～34・3）

（『新潟県文学全集第Ⅱ期6』より）

中田 みづほ

本名 瑞穂。別号、穠翁、瑞翁。明治26（1893）・4・24～昭和50（1975）・8・18、島根県津和野町生まれ。脳神経外科学者。大正6年東大医学部卒業後近藤外科在局中、長谷川零余子らの指導により高浜虚子に師事、作句。東大俳句会を水原秋桜子らと創立。大正11年新潟医科大学赴任後、新潟県内のホトトギス系俳人の中心となり、昭和4年俳誌「まはぎ」を創刊。選者となり浜口今夜（内科学教授）とともに「句修行漫談」を連載し、これが水原秋桜子のホトトギス離脱の契機となった。高野素十（法医学教授）が赴任するに及び、多くの俊秀作家を育成し、有季、定型写生俳句の一大牙城を形成した。夫人妻子（しげこ）も俳人であったが夭逝する。定年退官後、学士院会員、文化功労者となる。生涯高野素十の親友としてその作品を高く評価していた。「まはぎ」は病没とともに終刊。享年82歳。新潟市西堀法音寺に葬る。余技としての日本画は逸品である。句集『春の日』（亡妻妻子との合同句集）（昭11）『刈上』（昭28）『刈上のあと』（昭47）『みづほ全句集』（昭56）『中田みづほ選集』（昭51）

（『新潟県文学全集第Ⅱ期6』より）

高野 素十

本名 興巳（よしみ） 明治26（1893）・3・3～昭和51（1976）・10・4 大正7年東大医学部卒業。同大法医学教室にて研究。ドイツ留学。昭和10年新潟医科大学教授、医科大学長、奈良医大教授を歴任。大正12年より高浜虚子に師事、「ホトトギス」に投句。虚子の唱導する「花鳥諷詠」「客観写生」の最も忠実な実践者として凝視と精確な描写により、自然界と人間の弱者に対する自愛と共感をそそいだ。中田みづほとは刎頸の友。昭和51年10月4日相模原市の自宅にて83歳で死去。句集『初鴉』（昭22）『雪片』（昭27）『野花集』（昭28）『高野素十自選句集』（昭52）『素十全句集』（昭54）『素十全集』全5巻『同別巻』（昭53）『素十・春夏秋冬』（昭60）

（『新潟県文学全集第Ⅱ期6』より）

濱口 今夜

本名 一郎。明治 26 (1893)・7・23～昭和 18 (1943)・3・1、和歌山県西牟婁郡串本町生まれ。大正 7 年東大医学部卒業。内科学専攻。同 11 年新潟医科大学助教授として赴任。中田みづほより俳句を教わる。同 14 年医学博士。ホトトギス同人、昭和 11 年教授となり浜口内科を主宰し俳誌「まはぎ」の選をする。同 13 年頃より腎結石に罹患、次第に病状悪化、同大附属病院にて 51 歳で死去。新潟市瑞光寺に葬る。同寺に虚子の追悼句碑がある。遺句集『濱口今夜句集』(昭和 19)『今夜句集』(昭 47)

(『新潟県文学全集第Ⅱ期 6』より)

河東 碧梧桐

本名 秉五郎、別号 青桐・女月・桐仙・碧梧。明治 6 (1873)・2・26～昭和 12 (1937)・2・1、愛媛県松山千舟町生まれ。漢学者河東静溪の五男。高浜虚子と伊予尋常中学、旧制三高、二高と同級、共に正岡子規に俳句を学ぶ。明治 30 年松山で「ほととぎす」が創刊されると選句、俳句、文章を発表、同 35 年 9 月 19 日子規没後は「日本俳句」の選者となり「温泉俳句」をめぐる虚子との対立を深めながら新傾向派を形成する。同 39 年から全国を遍歴する旅で、新傾向運動をつづけ、明治 40 年 11 月 1 日から 12 月 12 日まで越後、佐渡の各地に滞在、猪股鹿語、西村絶頂、小林烏啼、塚原天南星、中山烏賊らの同志と交流し旅行吟を残す。『三千里』(明 43) にその紀行記事をのこす。大正 4 年 3 月中塚一碧楼らと俳誌「海紅」を創刊する。ともに県内よりの参加があったのはこの遊歴があったことによる。県内自由律派の系統形式もこの来歴に由来する。烏啼は六朝の書風も学んでいる。前記『三千里』につぎ『続三千里』(上巻のみ大 3) には、多数の俳句関係著作がある。『碧梧桐句集』(大 5) 大須賀乙字編をいれ 4 種ある。『子規を語る』(昭 9)『子規回想』(昭 19) など資料的随筆を残す。個人的には虚子と晩年まで親交を保っており、能楽にも堪能であった。64 歳で病没。

(『新潟県文学全集第Ⅱ期 6』より)

佐藤 念腹

本名 謙二郎。明治 31 (1898) 5・28～昭和 54 (1979)・10・22、北蒲原郡笹岡村(現阿賀野市)笹岡生まれ。海産物商の傍ら俳句に熱中、大正 2 年より念腹の俳号で「ホトトギス」に投稿を始める。同 10 年初入選、同 11 年新潟医科大学に赴任した中田みづほに師事。同 13 年高浜虚子来遊に面晤、地方俳誌「蒲」(長岡市)に参加。昭和 2 年ブラジルに移民。渡航、開拓に従事するとともにブラジルでの日本人への俳句の普及に尽力する。移住にさいし虚子より贈られた「畑打って俳諧国を拓くべし」の餞別句に答えた。「まはぎ」の創刊後も投句をつづけブラジル俳壇をきずく。俳誌「木陰」(昭和 23 年)を創刊し、原始林を廻って開拓地を訪れ俳人を育成した。高浜虚子、星野立子、高野素十と親交を重ねる。サンパウロ市にて 82 歳で病没。「ブラジルは世界の田舎むかご飯」の句碑が出湯温泉石水亭前にある。没後俳誌「木陰」は廃刊となるが、弟佐藤牛童子のより俳誌「朝陰」として継続創刊され誌友四百名余を持ち現在に至っている。句集『念腹句集』(昭和 28)『念腹句集第二』(昭和 36)『木陰雑詠選集』(昭和 54)『ブラジル俳句集』。

(『新潟県文学全集第Ⅱ期 6』より)

日時：平成24年11月11日（日）

午後2時～3時30分

（開場：午後1時30分）

講師：蒲原 宏さん

（俳誌「雪」主宰・元新潟県立がんセンター新潟病院副院長）

江南区で盛んな俳句について、「高浜虚子」や「中田みづほ」「高野素十」「浜口今夜」などの俳人たちの紹介や、亀田郷と俳句の関わりについてお話をさせていただきます。

会場：亀田地区公民館 多目的ホール

定員：先着100名（無料）

申込み：9月23日（日）～11月7日（水）

新潟市役所コールセンター025-243-4894

【会期中の催し】

・展示会：「俳句の里—亀田郷と俳句—」

（江南区に関係する俳句・俳人たちを写真や年譜などで紹介します。）

・会場：亀田図書館2階「特別コレクション室」

・会期：平成24年10月6日（土）～

12月27日（木）

※10月6日（土）は午後1時30分からとなります。

お問い合わせ先

〒950-0144 新潟市江南区茅野山3-1-14

新潟市立亀田図書館（江南区文化会館内）

電話 025-382-4696 FAX 025-381-8003

亀田図書館新築移転記念事業

講演会「俳句の里—亀田郷と俳人たち—」



亀田図書館新築移転記念事業

展示会「俳句の里—亀田郷と俳句—」

江南区に關係する俳句や俳人たちを
写真や年譜などで紹介します。

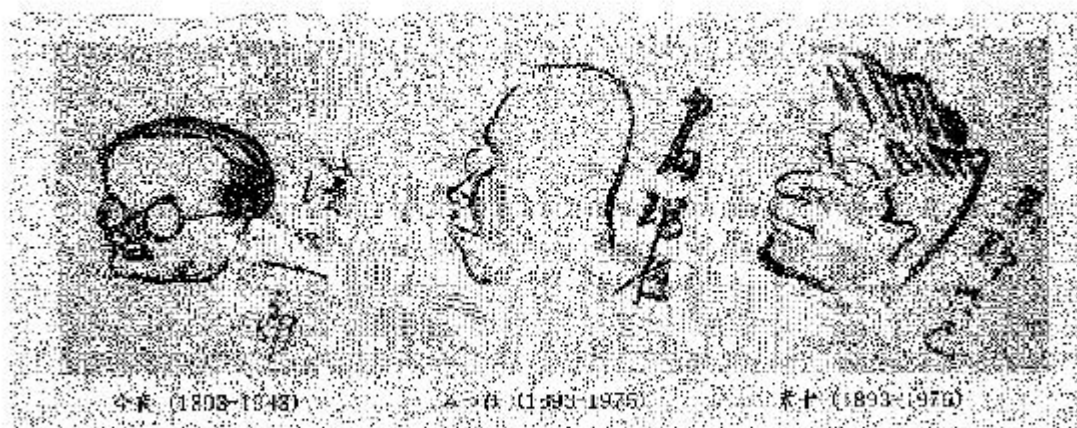
会期:平成24年10月6日(土)～

12月27日(木)

＜亀田図書館の開館時間＞

会場:亀田図書館2階「特別コレクション室」

※展示中の資料は、会期中貸出できませんのでご了承ください。



新潟大学名誉教授 山崎 龍 (1893-1975) 昭和14年第2
昭和天皇御宇

資料6 講演会の様子（参加者 105 人）



資料7 展示会「俳句の里—亀田郷と俳句—」



2階 特別コレクション室



2階 特別コレクション室



2階 特別コレクション室



2階 特別コレクション室

亀田図書館新築移転記念事業

蒲原宏講演会「俳句の里—亀田郷と俳人たち—」記録集

平成 25 年 2 月 日 発行

監修者 蒲原 宏

編集・発行 新潟市立亀田図書館

新潟市江南区茅野山 3 丁目 1 番 14 号

電話 025-382-4696

FAX 025-381-8003

「新潟市の図書館」ホームページアドレス <http://www.niigatacitylib.jp>

「亀田図書館」メールアドレス kameda.cl@city.niigata.lg.jp